

提供が急務であると感じた。

なお、今回の会議では初日の午後に 1-minute-madness という1時間半の枠がとられており、ポスター、デモ、ビデオの発表者に対して1分の時間が与えられ、会議参加者にアピールできるようになっていた。100件近い発表が次々と行われる様子は圧巻で、発表者も限られた時間で自分の研究をアピールするために工夫を凝らしており(歌で表現した発表者もいた)、大量のポスター件数をかかえる会議ではこのような事前紹介は有効であると感じた。

本報告で紹介したもの以外にも多数の興味深い発表があり、多くの情報はウェブサイト(www.ubicomp.org)にて公開されている。



Ubicomp2003 発表会場の様子

◆ ISWC2003

天目隆平

奈良先端科学技術大学院大学

2003年10月21日～23日の3日間、ISWC2003(7th IEEE International Symposium on Wearable Computers 2003)がアメリカ合衆国・ニューヨーク近郊の街ホワイトプレーンズで開催された。本会議では、31件の口頭発表のほか、12件のポスターセッション、11件のデモセッションも行われ、会場内にはウェアラブルコンピュータを装着した人達も多く、非常に活気に溢れた会議であったように思う。筆者も口頭発表の機会を得たので、本会議の様子を報告させて頂く。

本会議の参加者は、会議の性質上大きく分けてハード屋とソフト屋の二種類に分けられたように思う(もちろん両方に精通した人達もいるだろうが・・・)。その両

者が、自分達のフィールドだけでなく、お互いの最新の動向について情報収集できるというのも本会議の大きな特徴であろう。特に、スイス工科大のBüren氏らによる”Kinetic Energy Powered Computing – an Experimental Feasibility Study”と題した口頭発表では、ユーザの体中に小型の発電ユニットを装着し、ウェアラブルコンピュータに欠かせない電源の供給を行おうというアイデアが発表され、ソフト側の研究者達から多くの質疑・コメントが寄せられ、活発な議論が展開された。

2日目の夜、レセプションと同時に行われたデモセッションでは、最新の研究成果を実際に体感することができ、非常に有意義なセッションであったように思う。また、3日目の午後に行われたガジェットショウでは、参加者が自作のウェアラブルコンピュータを持ち寄りアピールするといった本会議独特のイベントも行われ、近未来のファッションショーといった様相を呈していた。

筆者は、今回が初めてのISWC参加であったが、参加者のモチベーションも高く、非常に活発な会議であると感じた。なお、本会議のプログラムは以下のページにて参照できる。

<http://www.cc.gatech.edu/ccg/iswc03/program.html>

また、次回は2004年11月にアメリカ合衆国・ワシントンで開催予定である。

<http://www.cc.gatech.edu/ccg/iswc04/>

◆ RO-MAN2003

野村竜也

阪南大学 / ATR

2003年10月31日から11月2日にかけて、サンフランシスコのWestin San Francisco Airport HotelにおいてRO-MAN2003(12th IEEE Workshop on Robot Human Interactive Communication)が開催された。

本会議は、10月31日夕刻のレセプションを兼ねたPlenary Speechに始まり、11月1日にさらに2つのPlenary Speech及び1～2日にかけて9カ国から約70件の口頭発表が行われた。本会議の各セッションは、インターネットによりリアルタイム配信されることが1つの特徴であった。

初日のPlenary Speechでは、三菱重工の金氏顯氏が、同社開発の家庭用ロボット”Wakamaru”の紹介を行った。特にこのセッションは、日本とサンフランシスコ会場と